

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32692

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25870835

研究課題名(和文) 精神障害者に対する「化粧を用いた社会参加支援プログラム」の有効性に関する研究

研究課題名(英文) A study on the effectiveness of "Supporting Social Participation through a Cosmetic program" for people with mental disorders

研究代表者

石橋 仁美 (ISHIBASHI, Hitomi)

東京工科大学・医療保健学部・講師

研究者番号：30583900

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、生活と化粧を関連づけた社会参加支援プログラム:Supporting Social Participation through a Cosmetic program(以下、SSPC)を開発し、標準治療と前後差を比較することであった。地域在住高齢者に対しては、SSPC群は標準治療群よりもQOLの改善効果があることが明らかになった。本研究を通してプログラムの開発、高齢者に対する効果の検証を行うことができ、精神障害領域への応用利用の知見も得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a "Lecture note for cosmetic program" which makes every occupational therapist easier to manage the program under the technical cooperation by Kanebo cosmetics, and examine the effectiveness of our program compare to traditional occupational therapy program. For the elderly living in the community, it was suggested that the SSPC group had significantly better QOL improvement effect than the standard treatment group. Through this research, we were able to develop programs, verify the effect on the elderly, and also obtained knowledge on application to mental disorders.

研究分野：作業療法学

キーワード：化粧 作業療法 社会参加支援 QOL 人間作業モデル

## 1 . 研究開始当初の背景

厚生労働省が精神科領域における退院促進事業を打ち出した今日では、精神障害者の社会生活の維持に焦点を当てた地域生活支援が不可欠となった。精神障害者が地域で継続して生活するためには、賃金を得る仕事に就くことが必要である。しかし、地域で生活する精神障害者の中には、仕事や日常生活におけるストレスから入退院を繰り返す事例が多い。精神障害者が地域で安定した生活を送るためには、ストレスへの耐久性の向上や生活への意欲を維持することが必要となるため、専門知識を活かした地域支援が求められている。

ところで、精神障害者の生活障害のひとつに、頭髮の乱れや不適切に派手な化粧の施しといった身だしなみの問題がある。身だしなみは人の印象を決定する重要な要素であるが、女性の化粧には、活動意欲を向上させることで社会的役割を維持したり、他者への関心を高めたりする効果があるとされている。精神障害者への化粧を利用したプログラムの効果研究では、精神科病院に入院している患者の意欲の向上や、心理状態の肯定的な変化が認められていた。しかし、これまでの研究は全て入院患者を対象としており、地域で生活する精神障害者を対象とした研究は全く行われていなかった。

2012年当時、精神障害者の身だしなみに関する原著論文は医中誌で6件と少なく、特に化粧を施すアプローチに関する論文は2件であった。また、この2件の研究も、化粧プログラム前後の音声分析や行動観察に基づく客観的評価を行っており、日常生活や社会生活の変化には注目していなかった。

そこで、我々は2012年に1都3県の精神科病院やクリニック等256施設に所属する精神科作業療法士(各施設1名)を対象に「化粧を用いた作業療法と作業療法対象者の化粧状況」に関するアンケート調査を実施した。

その結果、88%の作業療法士が「化粧に問題のある対象者がいる」と答え、76%の作業療法士が「精神科作業療法で化粧の支援が必要である」と答えていた(Ishibashi, et al, 2013)。

## 2 . 研究の目的

本研究の目的は、カネボウ化粧品の技術協力のもと、我々作業療法士のみで行っていた既存の「化粧プログラム」を、性別に関わらず作業療法士が運営しやすく、対象者の化粧行動の習慣化を促す「生活と化粧を関連づけた社会参加支援プログラム: Supporting Social Participation through a Cosmetic program(以下、SSPC)」として改良し、対象者のQOLに着目し、その有効性を検証することとした。

## 3 . 研究の方法

我々は、地域で生活する精神障害者を対象として、化粧を施すだけではなく生活に焦点を当てた学習会を取り入れ「化粧プログラム」を実施した結果、対象者の肯定的な心理的变化以外にも意欲的な外出行動が認められた。しかしながら、この変化の多くはプログラム当日に限られており、対象者のQOL向上を目的として化粧行動の習慣化を目指すプログラム開発が課題であった。さらに、2012年に実施したアンケート調査から、多くの作業療法士が化粧支援を必要と考えているにもかかわらず、当時化粧の支援を実施している施設は26%で、多くの施設が実施していない、あるいは以前実施していたが今は実施していなかった。そのため、SSPCは対象者にとって効果のあるプログラムとなるだけでなく、作業療法士が運営しやすいプログラムになる必要があった。そこで、研究段階として、1) SSPC実施マニュアルの作成、2) SSPCの対象となるクライアントに対するプログラムの実施の2段階を組むこととし

た。

#### 1) SSPC 実施マニュアルの作成

カネボウ化粧品の技術協力のもと、SSPC を運営する作業療法士のための実施マニュアルと、対象者にわかりやすく化粧行動が習慣化しやすくなるよう工夫した教材を作成した。研究協力者の作業療法士に2日間の SSPC 伝達講習会に参加してもらい、地域在住の精神障害を有する女性に対してプログラムを運営してもらった。実際には2名の男性作業療法士が講習会に参加し、実施マニュアルや教材を確認しながら SSPC の目的を十分に理解してもらい、講義方法や化粧方法を伝達した。その後、作業療法士より運営上の問題点や改善点を聴取し、実施マニュアルの修正を行なった。

#### 2) 地域在住の高齢者女性を対象としたランダム化比較試験

当初最終介入試験対象を「精神障害を有する方」としていたが、SSPC への興味がある作業療法士は多いものの倫理的理由から研究協力施設が少なく、また対象者から参加後の詳細な意見・感想をインタビューによって調査する必要があったため、精神障害を有する方だけを対象に限定するのではなく、地域在住の高齢女性としてクロスオーバー試験を実施した。東京都内において SSPC の手技を熟知した作業療法士数名によって地域在住の高齢女性(65歳以上85歳未満で要介護認定を受けていない女性)を対象としたランダム化比較試験である。対象者は東京都4箇所で募集し、ランダム化の際は各地区を層としてA群とB群に割り付け、介入群を「SSPC(SSPC: Supporting Social Participation through a Cosmetic program)を実施する群」、対照群を「ものづくりを実施する群」とした。

SSPC は、学習会、化粧の実践、対象者が希望する課題の実践で構成されている。ものづくりは、作業療法で用いられる紙細工やマク

ラメなどを行い、日常生活でも行えるように資料を提示して、容易に満足できる仕上がりになるコツなどを指導した。両群とも4ヶ月間で8回のセッションを行った。評価には、基本情報、MMSE、OSA-、WHOQOL26を使用した。さらに、試験終了後に対象者へ各プログラムの感想や日常生活への影響についてインタビュー調査を行った。

#### 4. 研究成果

本研究を通じて、下記の点が成果として挙げられた。

##### 1) プログラムの質の担保

先に述べた通り、本研究を通して作業療法士向けの実施マニュアルを作成したことにより、プログラムの質の均等性を確保することが可能になった。実際、精神科に実施した作業療法士2名、高齢者に実施した1名とプログラムを開発したチームが別の対象者に行った内容を時間と質の2側面から比較を行ったが、開発者とマニュアルに基づき実施した者との間に大きな違いはなかったと考えられる。したがって、今後のプログラム検証で算出されるプログラム実施時の前後比較の効果量を示すことにより、プログラムの質の担保が可能になると思われる。

##### 2) 効果検証

東京都A,B区で4箇所のべ5回実施し、70名が解析対象者であった。年齢や性別に有意差はなく、認知機能の指標として行ったMMSEにも有意差は認められなかった。

SF-12の前後差を比較した結果、介入群の方が対照群に対して身体の痛みの項目で有意に改善していた。この結果は、作業リテラシーの教育に焦点をあてた川又らの報告と類似する成果であった(川又ら,2012)。WHOQOL26は、社会的関係と環境領域の項目で介入群の方が対照群よりも前後差が有意に大きい結果となった。なお、これらの結果は、現在論文投稿準備中である。

以上より、本研究を通じて SSPC は生活習

慣について化粧を通して振り返り、また、化粧ができるように支援することにより、今の生活に充実感をもたらしたり、新しいことへの挑戦を後押ししたりする効果が期待できるのではないかと結論づけた。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

- 1) 石橋仁美, 石井良和, 石橋裕, 猿渡敬志: 介護予防における「生活と化粧を関連づけた社会参加支援プログラム: SSPC」の有用性. 第51回日本作業療法学会, 2017.
- 2) Hitomi Ishibashi, Yoshikazu Ishii, Yu Ishibashi, Keishi Saruwatari, Chonhi Kin: Necessity and effectiveness of intervention in making up by occupational therapy: A questionnaire survey to psychiatric Occupational therapists. 16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists, 2014.
- 3) 石橋仁美, 石井良和, 石橋裕, 高田夕美, 下田美香: 「化粧」を用いた支援の実態調査～精神障害領域における文献レビューより～. 第47回日本作業療法学会, 2013.
- 4) Hitomi ISHIBASHI, Yoshikazu ISHII, Yu ISHIBASHI, Yumi TAKADA, Mika Hitomi ISHIBASHI, Yoshikazu ISHII, Yu ISHIBASHI, Yumi TAKADA, Mika SHIMODA, Ayako NAKASHIMA: Makeup issues with women with mental disorder -By inquiries for occupational therapists -. World Psychiatric Association International Congress 2013, 2013.
- 5) Yu Ishibashi, Hitomi Ishibashi, Yoshikazu Ishii, Yumi Takada, Mika Shimoda: The effectiveness of an occupational therapy program for health promotion using cosmetics among dwelling elderly: A pilot study. World Psychiatric

Association International Congress 2013, 2013.

〔図書〕(計0件)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

石橋 仁美 (ISHIBASHI, Hitomi)

東京工科大学・医療保健学部・講師

研究者番号: 30583900